

喰国の大王子とある

ロイヤルイーター

小説筆祭競介
挿絵 鈴木玖

W美少女姫とHな女王様で母娘并

立ち読み版





登場人物紹介

Characters

そんなに
おっぱいが恋しいの？



ウィル

小国トネリコの王子。人質として
クレーヴェルに送られてきたが、
お姫様を墮として内部から国を
乗っ取ろうと考えている。

アナスタシア

大国クレーヴェルを治める女王。夫である先
王に先立たれた後、女ながらに大国を統治し
てきた。だが、女の欲望を持て余したその熟
れた肢体をウィルに狙われてしまい……!?

たまには私でもひとりで、
考え事ぐらいします。

何、お姉様に色目を
使ってるんですのー！



キアラ

エリーゼの妹であるクレーヴェルのお姫様。
姉のエリーゼのことが大好きで、男のことが
大嫌い。エリーゼを狙うウィルを天敵のよう
に警戒しているが……!?



エリーゼ

クレーヴェルの第一王女。しっかりした性格
で、母のアナスタシアの代理として他国や国
内の貴族と交渉を行うことも。王位継承権を
持っているため、ウィルのメインターゲットに。

序章	とある人質王子の野望	007
第一章	美しきロイヤルファミリー	011
第二章	セクシー女王様との大人な一夜	044
第三章	高飛車お姫様のママの付き添い初体験	089
第四章	清楚なお姫様と女王のヤキモチ3P	146
第五章	みんなまとめてロイヤル母娘丼	206
終章	とある ^{ロイヤルイーター} 大国喰いの誤算	252

第一章 美しきロイヤルファミリー

「これが……大陸一の王宮か……」

クレーヴェルの王都に着いたウィルは、その王宮の奥にある控えの間にいた。部屋の造りから小さな調度品に至るまで、トネリコとは洗練度がまるで違う。とても華やかなのが行きすぎではおらず、その辺りの匙加減が絶妙なのだ。

これまでずっと遊び続けてきたウィルには——いい言い方をすれば生粋の趣味人だけに——その素晴らしさが、理屈ではなく肌感覚として理解できる。

（凄いとは思ってたけど……ここまでとはな……）

少なくとも文化度では、田舎者の自分では勝負になりそうにない。

そして勝てないフィールドで戦いをしないことは、弱者戦略の基本である。

（これはもう最初から自分が田舎者だということを前提に、笑いのネタにしていた方がいいな）

無論、ターゲットである二人の姫に対する時の、自分の立ち振る舞いについてだ。

女の子に対しコンプレックスは隠そうとすればするほど卑小に映り、逆に堂々と晒してしまえばそれが魅力に映る場合もある。

決してイケメンではない自分がモテるには、この辺りの立ち振る舞いを時と場合に合わせて上手く使い分ける必要があった。

「ウィル様。陛下がいらっしゃいます」

使いの者にそう告げられ、少年はすぐに姿勢を正した。

そして部屋の扉が重々しく開かれるのに合わせて、深く頭を垂れる。

「よくいらっしゃってくれました」

優しさと温かみに満ちた女性の声に、身体がフワッと包まれた。

クレーヴェルの女王様は、どうやら噂通りの優しい気性の方である。

「今回はわざわざのお招き、ありがとうございます」

ウィルは頭を下げたまま慇懃な口調で返事をする。

「まあまあ。そんなにかしこまらないで。まずはお顔を上げてください」

「それでは失礼いたします」

促されるまま顔を上げて——ウィルは思わず息を飲んだ。

（これが……クレーヴェルの女王様？ 本当にアナスタシア様？）

歳は三十代の半ばだと聞いていたが、実年齢よりも十歳は確実に若く見える。

女を見る目には自信のあるウィルですら、仮に二十五歳だと紹介されたら、なんの違和感もなく納得してしまうことだろう。

しかしそれは、あくまでルックスだけの話。

決して歳相応の落着きや包容力を感じないわけではない。

大人の女性としての品格やしっとりとした魅力も十二分に備えながら、瑞々しい真っ白な肌のためかとても若く見えるのだ。

（それに……美しいとは聞いていたけど……ここまでとは……）

その美貌はとても優しく、見る者の気持ちを自然と癒してくれる。

まるで内面から溢れ出る慈愛深さが、そのまま形になったようだ。

それでいて、おっとりとした瞳を縁取る睫毛の影や、優しい笑みの形を崩さない口元からは、三十代半ばの未亡人ならではの、匂い立つような女の色気も漂っている。

情の深さをしみじみと感じさせる母性と、牝の本能を無性に掻き立てる牝の色気が、彼女の美貌の中で見事なまでにひとつになっていた。

しかし——これが顔ではなくプロポーションとなると、セクシーさが完全に優る。

大胆に開いたドレスの胸元からは豊かなバストの谷間が覗き、ウエストラインはまるで蜂のように細く括れていた。ドレスのスリットから覗く長い脚も、付くべきところにはむっちりとした肉が乗り、細くあるべきところはキュッと引き締まっている。

（な、何だこのエロさは……。めっちゃうちゃ上品なのに……エロすぎるぞ……）

本来ならば相反する清と淫が、違和感なく溶けあっている。

トネリコにはこんな女性、ひとりもいなかった。

少なくともウィルは今まで見たことがない。

アナスタシアの持つて生まれた女としてのポテンシャルが、大国の女王としての生活で十数年も磨かれて、こんな凄い女性が完成したのであろう。

女慣れたウィルですら、ただ彼女を眺めているだけで意識がピンク色に茹^ゆつてきてしまう。

「ウィルさん。ここを貴方の家だと思って、気兼ねなく暮らしてくださいね。そして何か困ったことがあったら、遠慮なく私に言ってください」

「はい。お気遣い、ありがとうございます」

彼女に対する淫らな印象をおくびにも出さず、真面目な顔のまま頭を下げる。

「そんなに堅苦しくなくていいですよ。これからは私のことは家族だと……母親だと思ってください」

「そんな。恐れ多いことです」

「本当はお姉さん、って言いたいところなんだけどね」

少年が恐縮した受け答えを続けていると、女王様は茶目つ氣たつぷりに片目をつぶり、軽い冗談を口にくれた。どうやら形ばかりの歓迎ではなく、本気で自分を親しく受け入れようとしてくれるようだ。

そんな相手にいつまでも形式ばった対応をしていては、逆に悪印象になってしまう。

「はい。それでは遠慮なく」

ウィルも如才なく、今までよりも軽い調子で口元に笑みを浮かべた。

「でもアナスタシア様ほどお若い女性を、母親とは呼べません」

これは決してお世辞ではない。

こうして会話をしている間、やはり実年齢よりも十歳は若く見える。

おっとりした雰囲気と併せて、いかにも『優しいお姉さん』という感じだ。

「まあ、お上手なこと」

彼女は笑みを見せるが、それも自分が若く言われたことが嬉しかったわけではない。

堅い対応だったウィルが、多少なりとも砕けた口調になったので気をよくしたようだ。

（俺の第一印象は悪くないみたいだな。でもこれは……なかなか強敵っぽい……）

この国で王冠を頂くには、この女性に認められることが何より必要になる。

相手が人格者であればあるほど、自分のやり方で取り入るのは難しいはずだ。

しかしウィルは、内心でペロリと舌舐めずりをしていた。

（でも、選択肢がひとつ増えたな）

娘を落として結婚するのがベストだが、場合によったらこの女王様と男女の関係を持つのもありである。

ウィルの信条は、あくまで自分が心から楽しいことをすること。

その点に関しては妥協するつもりはない。

なのでアナスタシア本人を見るまでは、自分の母親とたいして歳の違わない彼女と性的な関係を持つことは——たとえそれが自分の野望の近道であったとしても——考えに全くなかった。

しかしこの人が相手ならば、なんの問題もない。

いやむしろ、自分の野望などとは別腹で、今すぐにも口説きに入りたいところだ。

「せっかく若いとお世辞を言ってもらった後で申し訳ないけど……貴方と同年代の私の娘たちを紹介しますね。——二人とも入ってきなさい」

ウィルが内心そんな不遜なことを考えていると、女王が部屋の外に声を掛け、再び扉が開かれた。

さて。自分の野望的には、今からが本番だ。

美しすぎる母親に向いていた気持ちを一旦、リセット。

確か長女の名がエリーゼ、次女がキアラだったはず。

「ツツツツツ!!」

新たに現れた姫たちに、ウィルは両目を丸く見開き絶句した。

（これはヤバイ！ さすがアナスタシア様の娘たちだ！）

美しさのレベルが半端ではない。

まずは先に入ってきた清楚な美少女——おそらく彼女が長女のエリーゼだろう。

母親譲りの優しい美貌は、瞳も、鼻も、唇も、頬も、顎も——全パーツの形と配置が完璧すぎて透明感が凄すぎる。

そして母親は清淫が見事に溶けあっていたが、彼女の場合は清一色。

まるで清楚さをそのまま結晶化したような美しさで、見るだけで視線だけでなく魂まで奪われそうになってしまう。

（……でも、身体付きの方はかなりセクシーだよな）

プロポーションは歳相応で母親のようにムチムチはしておらず、かなり細身。

しかし胸だけはとても豊かで、バストの深い谷間がドレスから覗いていた。

「初めてお目にかかります。エリーゼと申します」

その清楚の化身のような姫が、自らのスカートを品よく掴み優雅に頭を下げてくる。

「こちらこそ初めまして。しばらくごやかいかいになることになった、トネリコのウィルス。どうかよろしく願います」

卑屈にならない程度に頭を下げてから、彼女と視線を合わせて軽く微笑む。

エリーゼも品よく口角を上げて、親しげな笑みでそれに応えてくれた。

（最初の顔見せだからな。相手のリアクションもこんなもんだろう）

自分は人質とはいえ、一応、王族同士のファーストコンタクトである。

ある程度、好意的な対応をしてくれるのは当然だ。

彼女がこの微笑み通り、自分を受け入れてくれたかどうかは不明である。

（……それにしても……いい女だなあ）

その物腰は柔らかく、言葉使いは楚々としていて慎み深く、所作のひとつひとつにハッと人を引きつけるものがある。

ただ容姿が桁外れに整っているだけではない、人としての内面的な美しさを凄く感じる。「ちよつとアンタ！ 何、お姉様に色目を使ってるんですの！」

その姉の姿をこちらの視線から遮るようにして、もうひとりの姫が二人の間に立ち塞がった。

（こ、こつちも可愛さが半端ないな……）

こちらを見つめる瞳の形は、完璧なまでのアーモンドアイ。

滑らかな頬も、綺麗に通った鼻筋も、細く尖った顎も、その造形の美しさは姉のエリーゼに優るとも劣らない。

むしろ歳が若い分、単純な容姿の可愛らしさは上回っていると言っても過言ではない。

しかし全身から醸し出される雰囲気は、天使のような姉とは正反対。

典型的な高飛車我儘姫である。

豊かな胸の谷間が丸見えで、スカートの丈も太腿の半ばまでしかなく、しかも身体にピッタリと張りつくドレス姿のためか、小悪魔めいてさえ見える。

ただそれだけに、出来すぎた印象の姉に比べて歳相応の女の子らしく、とても生き生きとしていて魅力的だ。

「この田舎者！ 人質のクセに、お姉様と言葉を交わすなんて生意気ですわ！」
いやいや。ちよつと生き生きしすぎているか……。

「およしなさいキアラ。ウィルさんに失礼ですよ」

そんな妹姫を女王が窘めるが、彼女はこちらを睨んだままだ。

「何よ？ 文句でもあるんですの？」

「いいえ何も。姫のおっしゃる通りです」

ウィルが口元に微笑をたたえたまま慇懃に答えると、キアラは片方の眉を跳ね上げるようにして唇を尖らせてきた。

「……面白くないやつ」

「申し訳ありません。妹はまだ」

見かねた後ろのエリーゼが済まなそうに頭を下げてくる。

「いいえ。本当に何も気にしていませんから」

人質なのも、田舎者なのも本当のことですから、と気にしていないことを続けて強調し

ようとしたがやめておく。

この流れでは、それを本心から言おうと、皮肉に聞こえる可能性がある。

まだ彼女たちの性格が把握できていない今の段階では、マイナスになりかねない。

この辺りの細やかな言葉の選択が、女性受けするためには意外に大切なものののだ。

「どうぞお気遣いなく」

なのでウィルは自然な笑みだけを浮かべて口を噤んだ。

すると大国の姫としての優等生的な立ち振る舞いに終始していたエリーゼの美貌が僅かに綻び、本心から申し訳なさそうな表情をチラッと見せてくれる。

素の彼女の感情を、初めて垣間見た瞬間だ。

それは高飛車な妹の言動を恥じている顔ではない。

田舎者。人質。と言われたウィルが傷ついていないか、本気で案じている表情だった。

(……凄くいい子だ)

ほとんどの王族や貴族は世間体をとても気にする。舐められたり、メンツを傷つけられたりすることが、そのまま上流社会の中での地位転落に繋がりがかねないからだ。

それだけに、今見せたエリーゼのリアクションはとても珍しい。

(クレーヴェルの姫までいくと、逆に素が出やすいのかな)

本気で詫びても簡単には舐められようがない立場だし、何より彼女の醸し出す圧倒的な

気品がそれを許さない。

むしろ今の自分のように、単純に好感を持つてしまう。

逆に妹の方は、素が出すぎてしまっているが……。

「こら、キアラ。ウィルさんに謝りなさい」

そして妹姫に詰め寄っている女王は、素でお母さんである。

「いやですわ！　なんで私がトネリコみたいな小さな国の王子なんかに頭を下げなくてはならないんですの！」

自由すぎる妹姫は「べー」つとこちらに舌を出すと、

「行きましょう、お姉様！」

渋い顔をしているエリーゼの腕を強引に取り、そのまま部屋を出ていってしまう。

キアラは確か自分よりもひとつ年下と聞いていたが、どうやら記憶違いのようだ。

さすがにウィルも哑然としてしていると、女王が困った表情をしてこちらに振り返ってきた。

「本当にごめんなさいね。私の育て方が悪くて……」

「い、いえ。あまりに元気がよろしいので、あっけに取られてしましまして」

「私あまり構ってあげられなくて……」

前国王が病床についてからは、彼女がずっとこの国のトップを担っている。

なかなか育児までは手が回らなかったのだろう。



「本当に気にしてませんから」

「女親だけというのはやっぱりダメね。甘やかしてしまつて……。ウィルさんが、大人でよかつたわ」

「キアラ様はまだ、随分とお若いようですから」

「あの調子だから、に見えるけど……。あれでも貴方よりひとつ下なだけなんですよ」

「ええっ!? そ、そうなんですか……」

自分の記憶は正しかったようだ。

「……いつまでもお姉ちゃんにベツタリで……。もう年頃なんですから、姉ではなく男の人でも好きになれば……。少しはレディらしくなると思うんだけど……」

「は、はあ……」

「男女の機微がよくわかつていて、我儘な女の子の扱いにも慣れたような、誰かい人がいないか、ずっと気にはしてるんですけどね」

アナスタシアがそんなことを言いながら、妙に意味ありげな視線をこちらに向けてくる。ウィルとしては、なんとも答えようがないので、再び曖昧に「はあ」と頷いた。

「逆にエリーゼの方は私よりしつかりしているぐらいで」

「とても立派な方だとお見受けしました」

ウィルが本心からそう口にする、アナスタシアも満足そうに頷いた。

彼女にとっても、自慢の娘なのだろう。

すでに他国や国内の有力貴族との交渉面では、彼女が母親の代理を多く務めているとも聞いている。

「とにかく、ここを我が家だと思って暮らしてね」

「はい。ありがとうございます」

こちらが改めて頭を下げると、アナもそれに応えてゆつくり小さく顎を引き、それから悠然と部屋を出ていった。

※

クレールヴェル王家の女性たちと初面会をした後。

ウィルは自分に与えられた王宮内の一室で、ベッドに寝転びながら天井を見上げていた。さて、どうするか？

ターゲットは三人。

まず現女王であるアナスタシアだが——こちらは国政で忙しく、なかなか口説くまでの親密なコミュニケーションが取れないだろう。

自分の方がかなり若いというのも、メリットなのかデメリットなのか微妙なところだ。


（攻めるとしたら母性愛がメチャクチャ強そうだから、その辺りかな）

逆に現段階で絶対にならないのがキアラである。

大国クレールヴェルの姫という地位で育ち、この世の全ての男が取るに足らない者に見えるというそうだ。

(アナスタシア様も言ってたけど、まだ恋もしたことがないんだろうな)

身体の方は並みの大人を凌駕するほどセクシーに育っているのに、精神的にはまだ『女』になっていない。

落とす以前のである。

「となると……やっぱり一番の狙い目は……」

ウィルは脳裏に、天使のような清楚な美貌を思い浮かべていた。

※

クレールヴェルに来てから約二週間後。

王宮の庭をウィルが散策していたら、屋根とテーブルのある一角でエリーゼがひとりでお茶を飲んでいた。

周りを見渡しても、侍女すら連れていないようだ。

おそらくひとりになりたくて、そうしているのだろうか、

(チャンスだ)

相手の事情がなんであれ、ウィルがこんな好機を見逃すはずがない。

初対面以降、彼女を見かける時には、常にキアラが一緒だった。

そのためアプローチを掛けようにも、妹姫の強烈な邪魔がいつも入り、まともに会話することすらできていない。

この二週間で知ったのは、キアラが異様な男嫌いで超シスコンだということだった。

「いい天気ですね」

無難な入りで声を掛けると、庭の方に向けていた清楚な美貌がこちらを向いた。

「まあ、ウィル様」

彼女はすぐに、ふんわりと柔らかな笑みを浮かべてくれる。

恋愛経験値がバカ高い自分の目にも、それはただの社交辞令ではない、好意と親しみの籠った笑みに見えた。

（でも……勘違いしちゃダメだぞ……）

彼女は知り合いならば、誰にでもこの笑顔を見せているはずだ。

自分に特別な好意があるわけではない。

しかしそれは、巧みな作り笑いとも違う。

つまり誰にでも自然に好意と親しみを感じてしまう、まさに天使のような性格なのだ。

（だから皆が、この子に惹かれ、慕うんだろうな）

遊び慣れた自分でも、思わず心が吸い込まれそうになってしまう。

「ご一緒に、よろしいですか？」

「ええ、もちろん」

ウィルはエリーゼの隣に座った。

「おひとりなんて珍しいですね」

「たまには私でもひとりで、考え事ぐらいます」

彼女にしては悪戯っぽい表情と口調で微笑んだ。

私『でも』という言葉のチョイスで、自分は考え事をしないおバカな子に見えるでしようけど、という冗談のニュアンスを入れている。

やはり妹がいないと、細かなところでリアクションが違う。

こんな内容の言葉を彼女の口から聞いたのは初めてだし、どうやら機嫌はよさそうだ。

「あつ。申し訳ありません。考え事の邪魔でしたか？」

だから一応、謝っておく。

「いえ。丁度ひとりで退屈をしていたところで」

無論、エリーゼならこのように返事をしてくることを想定して謝ったのだ。

さて、どうしたものだろうか。

女の子の気持ちを引きつける基本は驚きやギャップである。

それにはまず、自分が彼女にどう見られているか知らなくてはならない。

「しかしクレーヴェルは凄いですね。田舎のトネリコとは、何もかもが違います」

「そうですか？」

「この庭に植えられている木々や草花のチョイス。そして決してそれがうるさく見えない厳選された品のよさ。ただ種類を揃えただけのトネリコの王宮の庭とは大違いです」

「まあ」

「料理も凄い。美味しいのはもちろんのこと、盛り付けやソースが凝っていて、一皿一皿が味覚的にも視覚的にも、まさに芸術作品です。つて、月並みな感想ですね」

「でも、トネリコにも美味しい料理はいっぱいあるのでしょうか？ ウイル様のお好きな料理は何ですか？」

「え？ トネリコ料理で、ですか？」

華美なクレージュエル料理を褒めた後だけに、シンプルなモノがいいだろう。

その中で自分が好きな故郷の料理となると――。

「親子丼ですかね」

「オヤコドン？」

「オヤコというのは、親と子供の親子です。えーと、具体的に言うとな鶏肉と卵を使った料理のことです」

トネリコは、遙か昔、遠い東洋の島国からやってきた民が起こした国だ。
なのでこの大陸の一般的な文化とは、一線を画するものがいくつもある。

「ああ。それで親子ですか。なるほど」

「鶏肉を出汁で煮て、それを卵でとじて、そのままご飯にかけて食べるんです。鶏肉と卵
つて全く印象の違う食材なのに、同じ生き物だからか、相性抜群で美味しいんです。特に
半熟卵のトロツと加減と、歯ごたえのある鶏肉とのハーモニーが抜群で」

「うわあ」

こちらの話を興味深そうに聞いているエリーゼの純粹さが眩しくて、ウィルは思わず視線を庭に逸らしてしまった。

「どうされました？」

「い、いや。エリーゼ様に話していたら、なんだか野蛮な料理に思えてきました。いや、
罪深い、というべきですかね」

「そうですか？ 私は美味しそうだと思いますけど？」

「だって、親と子を一緒に食べる料理ですよ。美味のためならば、己の欲のためならば、
それでいいという考えがあまり文化的ではない気がしました」

ウィルは苦笑しながら、視線を再び隣のお姫様に戻す。

「エリーゼ様の目には、私なんてさぞかし野蛮な田舎者に映っているのでしょうか」

「そんなことはありません。むしろウィル様からは洗練されたものを感じます」

彼女はこちらの苦笑を打ち消すような、明るい笑顔でそう返してくれた。

想定していたよりも好感触だ。

百パーセント、そのまま本心ではないだろうが、少なくともダサイ田舎者とは思われていないらしい。ならば。

「そんな嬉しいことを言われたら、思わず踊りたくなってしまいます」

ウィルは椅子から立ち上がると、両脚を大きく開いてガニ股になり、そのまま両手を上下させながら、滑稽な調子でドタドタと足踏みをはじめた。

「まあ、なんですかそれ」

こちらの動きに、エリーゼが目を丸くしている。

「トネリコの踊りです」

正確には母国の中でもかなりマイナーな踊りで、滑稽なことで有名な『ドジョウすくい』というモノなのだが詳細は伏せる。

「トネリコでは、嬉しいことがあると、こうやって踊るんです」

ウィルは大げさに尻を左右に振り、さらに滑稽さを際立たせた。

するとそれまで口元を押さえていたエリーゼが、思わずプツと噴き出してしまふ。

よし。掴みは上々だ。

ただ彼女を笑わせたことで満足しているわけではない。

自分の立場が、小国から来た人質王子というのは、普通に考えればマイナスである。

しかしネガティブなことや、コンプレックスになる類いのことを、自ら強調して笑いに変えれば、女の子には男としての強さに映る。

己のマイナスポイントを自らイジリ、これだけの笑いとなっていれば、このポイントはクリアだ。

「いやいや、申し訳ありません。嬉しくてつい」

苦笑いを浮かべるウィルにたいして、エリーゼが向けてくる視線が、さらに親しげなものに変わっていた。

（よしよし。流れは悪くないぞ）

特にこのエリーゼのように人を肩書きや見た目ではなく、その個人としてちゃんと見られる女の子には特に有効だろう。

「田舎者で申し訳ありません」

「そんなことありません。とつても素敵でしたよ」

エリーゼはまだクスクスと笑みを残している。

ここはもう一步、踏み込んでもいけそうだ。

「こんな僕に、クレーヴェルの優雅な社交ダンスを教えてくださいませんか？」

ウィルは恭しく頭を下げると彼女に向かって片手を伸ばした。

エリーゼは一瞬だけ驚きの表情を浮かべたが、すぐにこちらの手を取ってくれる。

社交ダンスは王侯貴族の基礎的な素養のひとつ。彼女ならばこれまで幾人もの男と踊ってきているはずで、この程度の接触には躊躇を見せない。

「ウィル様はご謙遜されているだけで、社交ダンスもお上手なんですよ？」

悪戯っぽい上目使いで、こんなことまで言ってくる。

かなり自分に気持ちいを許してくれている証だ。

「まさか。僕が踊れるのはコレだけですよ」

と先ほどと同じように、滑稽なリズムで尻を振ってみせると再びエリーゼが笑い出す。

（うーん。これが普通の子なら、もうほとんどイケてるレベルなんだが……）

とにかく手応えは抜群だ。しかし相手が誰にでも気持ちをオープンにできる天使のような人だけに、判断が難しいところである。

ウィルは試しに、少し強めに彼女の手を引いてみた。

「あっ」

と声を漏らした姫は少しバランスを崩し、こちらの胸の中にその身をもたれかけてくる。

（おおっ!! 思った以上に華奢だな）

どうしても豊かな胸の印象が強く、とても細いウエストの感触にドキリとした。

「申し訳ありません。強く引きすぎましたね」

「こ、こちらこそ、寄りかかってしまつて申し訳ありません。あ、あの、それでその……」

手を、その、お放しになって、その……」

エリーゼの頬には朱が走り、今まで見たことがない種類の動揺を見せている。かなりウブな性格のようだ。

それでいて、こちらを見上げる赤い美貌から嫌悪感は読み取れない。

これはもう少し踏み込んでもよさそうだ。

「え？　こうするのがトネリコ風の社交ダンスなのですが？　違ってましたか？」

サラッと嘘を言いながら、彼女の腰を引きつけるように抱き寄せる。

「え、ええ。クレージュエルではここまでは……」

彼女はその豊かすぎる胸の膨らみがこちらに当たらないように、両手を突っ張るようにして上半身の空間を保とうとしている。

しかしその分下半身のフォローまで手が回らず、腰同士が完全に密着してしまっている。「そんなことも知らないなんて、やはり私は田舎者ですね」

ここで先ほどのダンスを再現し、腰をカクカク振って彼女に擦りつけるのは、さすがにやりすぎだと自重した。今の段階で耳まで真っ赤になっているエリーゼでは、今度は笑いではなく悲鳴を上げてしまうことだろう。

（でも……思った以上に大丈夫だな）

彼女の美貌は真っ赤なままだが、いまだに嫌悪感は浮かんでいない。

そしてこれだけ真っ赤になっているというのは、彼女は相当ドキドキしているはずだ。人は感情が先行し、肉体反応がそれに追従するものだと思われがちだが、ウィルの経験則は違う。

得てして肉体反応が先で、感情が後の生き物だ。

つまりこうしてドキドキしている時にただ一緒にいることで、ウィルのことを好きだと錯覚し、いつの間にか本当に好きになってしまう場合もある。

少なくとも、相手が嫌悪感を出さない限り、これだけで十分にポイントが稼げている。

「あ、あの……ですから、その……」

顔を真っ赤にしたままモジモジしているエリーゼを眺めているのも、純粹に楽しい。

「手、手をお放しになってください。こ、困ります」

「ああ。これは失礼」

しかしさすがにまだこの段階で、あまり強引なことを続けるのはマズいと考え、やっと彼女の腰から手を離れた。

エリーゼは慌てて距離を取るが、上目使いでこちらを見つめる瞳には、咎める視線よりもウィルの出方を窺うような色が濃い。

（おおっ？ これはまだ押せるか？）

予想以上の手応えを感じながら、顔には爽やかな笑みを意識して浮かべる。

「それでは改めまして。クレールヴェル式の上品なダンスを教えてください」

そう言っただけから手を差し伸べる。

彼女は少し警戒の色を見せるものの、オズオズとこちらに手を伸ばしてきた。

「そんなに警戒しないでください。今度は——ふぎやっ!」

いきなり身体の真横から衝撃を受けて、そのまま横に吹っ飛んでしまう。

「お姉様! こんなところにいらっしやっただけですのね! お姉様に作り方を教えてください」
たクッキー! 今焼き上がりしましたわ!」

脇腹を押さえて振り返ると、バスケットを手にしたキアラが、口元を両手で覆って目をパチクリさせているエリーゼの前に立っていた。

「こらああ! 豪快に飛び膝蹴り入れといて、何がクッキーだ!」

先ほどのセクハラ中ならわからなくもないが、今はまだ手も触れる前だった。

「どうぞ、味を見てください♥」

「無視するな!」

最初の内こそ、この妹姫にも紳士的に対応していたが、あまりに高飛車の度がすぎるため、今ではこの調子でやりあっている。

「あら、いましたの? 田舎者すぎて周りの草木と同化し、目に入りませんでしたわ」
「……その割には膝の角度が完璧だったな」

こちらよりも背が低いクセに、その細い顎を反らすようにして自分を見下すような態度のキアラを、ウィルは身長差で物理的に見下す。

そして互いに無表情のまま、見下しあうように睨みあっていると、

「……ウィル様とキアラ……実は仲がいいですね。……私と二人っきりの時よりウィル様、ずっとイキイキとしています」

結果的に蚊帳の外扱いになってしまったエリーゼがボソッと呟いた。

彼女にしては珍しく、少し頬を膨らませた上目使いで。

（か、可愛い……）

普段の立ち振る舞いが優等生すぎるため、そのヤキモチ顔とのギャップが強烈だ。

女慣れしたウィルでも思わずドキリと胸の奥が高鳴ってしまう。

「それはとんだ勘違いですわ！ この小国の田舎者が、分を弁えない物言いをしてくるだけで、私は心底、迷惑いたしておりますの！」

「キアラ。ウィル様のことをそんな風に言うんじゃないありません」

「だって……」

「他の方には、それなりにちゃんとお行儀よくできるのに……なぜ、ウィル様にだけはそんなに突っかかるのですか」

彼女はそれだけ言うと、その美貌をハッとさせる。

「ま、まさかキアラ……貴女、ウィル様のことを……」

エリーゼが指先をフルフルと震わせて、ウィルと妹を交互に指さしてくる。

「……絶対にないですわ。それだけは……」

「……エリーゼ様。とんでもない勘違いをされています……」

この完璧お姫様。色恋に坎んしてだけはとてつもなく鈍いようだ。

思わず天敵の妹姫と共に、地を這うように低いテンションでツツコミを入れてしまう。
するとキアラはウィルとの一致が許せなかったようで、キッとその美貌を怒らせて、こちらにビシッと指を突きつけてきた。

「その逆です！ この田舎者、間違いなくお姉様を狙っておりますわ！」

（むう。コイツは逆に、妙に勘が鋭いな……）

下心のある男へのセンサーは、清廉すぎる姉よりも敏感らしい。

「……まあ。何を言うかと思えば……そんなはずありませんよ。私なんて……」

対して姉の方はリアクションが薄い。

謙遜しているわけではなく、本気の苦笑いで否定してくる。

先ほどあれだけのことをされておきながら、自分が狙われている自覚が全くないようだ。
「ムキーン！ お姉様！ その無防備さが私を不安にさせるのですわ！ 男を見たら、基本ケダモノだと思って頂かないと！ 特にこの田舎者はヤバイですわ！ 目を合わせるだ

けで、妊娠させられる恐れがありますわ!」

「おい! 俺は何かの妖怪か!」

人を見た目や肩書きで判断しない姉とは正反対で、キアラはとてもお高く留まっている。しかし彼女の自分に対する当たりの強さは、ただ田舎者が嫌いなだけではないようだ。なにしろ彼女の行動原理は、強烈なシスコン——エリーゼ愛。

とにかく姉のことが大好きすぎて、姉が取られるかもしれないと思うと、全力で牙を剥いてくる。

(エリーゼ様を落とすのに……コイツが一番やつかいだな……)

妹の特権で、常にエリーゼの周りにいるのが困りものだ。

「あらあら、まあまあ、随分と楽しそうですね」

そのキアラと睨みあっていたら——女王様までもやってきた。

「アナスタシア様。これは失礼を……」

ウィルはすぐに妹姫に向けていた怒り顔を引っ返めて、人質らしく慇懃に頭を下げた。

「そんなかしこまらないで。私たちのことは家族だと思って暮らしてください、と言ったのは私なんだから。ね」

「はい。ありがとうございます」

「私たちのことも、様付けなんてしなくていいんですよ。私のことはアナと呼んで」

「はい。それではお言葉に甘えて……アナさん、でいいですか？」

本来ならば『よろしいでしょうか?』というべきところだが、あえて敬語のレベルも下げてみる。

ここに来てからの二週間で、多忙なアナスタシアとも何度か会話を交わしている。

彼女の性格を考慮して、多少こちらが砕けた態度に出た方がいいだろうと判断した。

「ええ、もちろん。これからよろしくね」

アナスタシア——アナは全く気を悪くした素振りも見せず、それどころか——。

「この子たちのことも、これからは様付け禁止ですよ」

悪戯っぽい笑みを浮かべながらこんなことまで言ってくる。

「二人ともそれでいいわね」

と訊ねる母に対し、エリーゼは「ええ、もちろん」と頷いてくれたが、

「そんなの納得できませんわ!　なんで私たちが、こんな小国の田舎者と!」

当然のようにキアラは大反対。

ウィルは恐縮した表情で軽く頭を下げたが、内心ではほくそ笑んでいた。

(よし。いい流れだぞ)

アナはこの大国を見事に統治している人格者で、なおかつ普通のお母さんである。

そのアナがこれだけお行儀の悪い娘の振る舞いを、見過ごし続けるハズがない。必ずこ

ちらに味方して、この我儘お姫様の高飛車っぷりを、ガツンと注意してくれるはずだ。

そのアナが、お母さんの顔で口を開きかけた時――。

「キアラ。お母様にも、ウィルさんにも失礼ですよ」

先に妹姫を注意したのは、エリーゼだった。

驚いて彼女を見ると、いつもの清楚で控え目な笑みではなく、凜とした強い表情で妹を見つめている。

「でも、お姉様……」

そんな姉の様子に、彼女に心酔しているキアラが動揺しつつも、さらに言葉が続けようとする。が。

「キアラ」

重ねられたエリーゼの強い一言で、妹姫は口を噤んだ。

そして上目使いで姉を窺いつつ「……申し訳ありません」と殊勝に頭を下げている。

「わかればいいんですよ」

エリーゼがいつものように優しくニコツと笑うと、キアラは少し涙目になって「おねえさまあ」と抱きついていく。

そして姉姫の豊かな胸に顔を埋めるようにして「ごめんなさい」を繰り返す。

（……う、羨ましい）

服の上からでもわかる胸の膨らみの豊かさに、女慣れしたウィルでもキアラに羨望の眼差しを向けてしまう。するとその妹姫が、片方の頬をエリーゼの胸に深く埋めたまま、こちらを勝ち誇った視線で見つめてきた。

(……………その目付き、絶対に俺と仲良くなんてする気ないよね?)

お姉様は絶対に誰にも渡しませんわ、と改めて宣言された気分だ。

そんなキアラをジトツとした目で眺めていたら、

「なあにウィル? そんなにおっぱいが恋しいの?」

アナがそんなことを言いながら近寄ってきて——むぎゅっうう。

「うわわっ!!」

いきなり両手がこちらの首に回されて、その豊かすぎる胸の谷間に抱き寄せられた。

「ち、ちよつとアナさん! な、何するんですか急に!」

両頬を圧迫する柔らかなボリウム感に、目を白黒させて絶叫する。

彼女のドレスは胸の上部が丸出しなので、顔が直に乳房に埋もれてしまう。

無論、その感触は気持ちいい。

今までウィルが触ってきたバストの中で最高かもしれない。

アナと二人つきりなら存分に堪能させてもらおうところだ。

「お母様! 何をなさっているんですか!」



しかしここには、狙ってる女の子がいる。

その母親の胸に深く顔を埋めている構図というのはかなりマズい。

「いつまでお母様に抱きついていてる気ですの！」

そんな時、キアラの鋭い声が真横から聞こえてきて——ドガシッ！

「ぶぎやああ!!」

先ほどとは逆の脇腹に豪快な飛び膝蹴りを決められて、再び真横に吹っ飛ばされた。

「あらあら」

とアナは目をパチクリさせているが、

「キアラ。よくやりました」

先ほどは妹をキツク注意していたエリーゼが、今度は一転して褒めている。

「えへへへ♥ それほどでもありませんわ♥」

そして姉に褒められた妹は、無条件に喜んでいた。

（……やつぱり大国クレーヴェルの王族だな……）

常識人だと思っていたアナやエリーゼも、やはり浮世離れしているところがあるようだ。

「は、はははは……」

痛む脇腹を押さえつつ引き攣った笑みを浮かべながら、そう認識を改めるウィルであった。

この大国の命運を——いや、この大陸全ての命運を左右しかねない女王の舌は、柔らかさよりもしなやかさが優っていた。

そして自然とこちらのキスに動きを合わせてくるところは、さすが大人の女性である。貪るようなガツつく舌の動きでは味わえない、舌同士が溶けあうような肉悦をたつぷりともたらしめてくれる。

「んんッ!？」

滑らかに動いていたその舌が、いきなりビクンと硬直した。

蜜壺中をゆつくりと愛撫していた指で、先ほど確認しておいた弱点——蜜路に入ってすぐの裏側部分——をウィルが激しく擦りはじめたからだ。

先ほどまでの繊細な手つきとは正反対に、スピードは速く、力もかなり入れている。

女体も腹筋から太腿の内側までが、突発的にビクビクと痙攣しはじめた。

「つふふぁ!! だ、だめっ!! そ、そんなに激しくしちゃ!」

たまらずディープキスを解き叫ぶアナの声は、すぐに甲高い喘ぎ声に切り替わる。

滴るほど愛液を分泌しているだけに、こちらの指責めが痛いわけではないだろう。

それどころか念入りに愛撫した熟れた女体は、大抵の刺激は快感と感じるようになっていくはずだ。その状態にまで追い詰めてからのピンポイント責めで——。

「何がダメなの? そんなに気持ちよさそうにしてるくせに」

「ああっ!? だ、だめっ! 急にこんなッッ!」

「イキそうなんですよ? 見せてよ。大国クレージュルの女王様が、田舎者のガキの指で派手にイッちゃうところ」

「もう! い、意地悪な言い方しないで!」

アナの美貌から大人の女性としての余裕が消えて――眉間に深い皺を刻み、赤く染まった頬は官能的に震え、濡れた瞳には愉悅が色濃く滲み出している。

彼女の美貌を初めて見た時、清と淫が見事にひとつになっていると感嘆したが、今は完全に淫一色。

（うわっ。めっちゃエロい!）

こんな表情を見せられたら、指の動きがますます激しくなってしまう。

するとその指責めの激しさに呼応するように、蜜路が内側へと収縮し、女王の腰がビクと震えながら持ち上がっていく。

「ああっ! だ、だめっ! 本当にも、もう……くううう……ッッ!」

アナは下唇を強く噛むと、まるで尻を激しく振るようにしてカクンカクンと空腰を打つ。（イッた!）

その瞬間、自分が性的な快感を得たわけでもないのに、己の全身を決して他では味わえない満足感が駆け巡る。

何度、女性をイカせても、この喜びは全く色褪せない。

「つくふあ。つくふあ……つくふあ」

軽く氣をやった女王は、すぐに腰をベッドに落とした。

しかしウィルの指責めはまだ止まらない。左手をアナの首の後ろに回して逆側の肩を掴み、彼女を逃がさないようにして——グチュグチュグチュグチュッ！

右手を再び猛スピードで上下させる。

指の腹が捉えているのは、入り口上にある蜜壺の弱点。

狙いはもちろん、潮吹きだ。

「ええっ!? ちよつ、ああ！ ダメ！ こ、壊れる！ 壊れちゃう！ ああっ！」

果てた直後、一瞬だけほっくりしていた美貌が、驚きと快感に染め上がる。

「まだだよ！ ほら！ もっと思いっきりイッて！ 俺に全てをさらけ出して！」

「い、いや！ 本当にだめ！ 何これ！ 何なの——ああッあああああああああ！」

果てた直後に猛スピードで指責めをはじめてすぐ。時間にしてほんの数秒。

アナの喘ぎ声と腰の位置が先ほど以上に高くなり、ビクビクと痙攣していた太腿の内側と腹筋が激しく力んで動きが止まったその直後。

——ぶしやあああああああああああ！

盛大に潮を噴き出した。



己の中で渦巻く様々な感情を発散させるように、実の娘の舌をむしゃぶりはじめる。

「んんっ！ お、お母様、そんないきなり——んんんんん！」

己を挟る男根だけに意識を持つていかれていたキアラに、強制的なディープキスの快感も加わり視線が正面のアナに向く。そして全身をセックスの快感にビクつかせながら、彼女からも母親を抱きしめ、舌を激しく絡めていく。

（凄。母娘であんなにベロンベロン、舌、絡めまくってる……）

きつく抱きしめあっているために豊かな胸もつぶれ、それが服越しにむっちりと盛り上がりながら、自分の突入の動きに合わせてタプタプと揺れているのもたまらない。

ウィルは再び、キアラからペニスを抜いてアナを貫いた。

それでも二人はキツく抱きあつたまま、濃厚なディープキスを続けている。

しかし今度はアナの口から愉悅のくぐもり声が漏れ、キアラの動きに嫉妬が混じる。

——グチュン！ くちゅヌチュ！ ぐちゅッ、ぬちゅずぱぱン！

ウィルは何度もアナとキアラを交互に貫き、二人の身体を存分に味わう。

アナの蜜路はまるで自分のペニスの形に変形でもしているようにジャストフィットし、キアラの中はとにかく若く引き締まりこちらをキツく絞り上げてくる。

（まさに親子丼だ！ これ、最高の親子丼！）

例えるなら、旨みたっぷりでよく引き締まった歯ごたえ抜群の鶏肉と、しっかりと熟成

された出汁をたっぷりも含んだトロトロの半熟卵。

素材も質も考慮して——ロイヤル母娘井というべきか。

まさに腹を空かせた食べ盛りの少年が、極上の親子丼を欲望の赴くまま掻き込むような勢いで、横に並んだ二つの牡蠣を交互に貫く。

二人はもう、いちいちウィルが移動しても嫉妬するような素振りは見せない。

ただただ抱きあう相手と性の快感を貪り続けている。

（ヤバイ！ これエロ気持ちよすぎて、もう我慢できないッ！）

禁断の母娘井があまりに美味すぎてウィルももう限界だった。

「もう、イクぞ！ 最後はキアラの中でイクからな！」

そう叫ぶウィルが今身体を繋げているのは母親のアナである。

絶頂前の他の動きを忘れた動物のような荒々しきで、奥までヌルヌルでトロトロの蜜壺を激しく貫きまくる。

「ああああああ！ そんなに奥までされたら私いい！ また、またああああ！」

今まで何度もイッているが、フィニッシュ直前の突入は特別だ。興奮しきったこちらのテンションも伝わり、女王が姫を強く抱きしめながら顎を大きく仰け反らせている。

「す、凄いですわぁ。お母様の震え方もお……ウィルの荒々しさもお……」

これが初体験のキアラは、恍惚に瞳を細めてそんな母を見つめている。

「ダメ！ またイツちゃうのおお！　すごいのでイツちゃうのおおお！」

「俺もイク！　ああつ！　イクぞ！　あああああああああ！」

ウィルは最後にアナの骨盤を砕くような勢いで腰を突き入れてから、猛スピードでペニスを引き抜いた。

その直後、まるで栓が抜かれたスパークリングワインのように、

——ぶしやあああああああああ！

アナが派手に潮吹き絶頂を決める。

ウィルはその飛沫に構わず真横で待っているキアラの牝裂に、いささかの遅延もなく、根本まで一気に男根を突き入れ動きを止めた。

——どぶん！　どぎゅドブツ！　どぶどぶドブン！

「な、何ッ!?　このはちきれそうな——つあああああああああああ！」
挿入直後、キアラの美貌に浮かんだのは軽い戸惑い。

眉間に軽い皺を寄せ、潤んだ瞳を瞬かせた。

それが初の膣内射精の衝撃で、快感一色に染め抜かれる。

女体もまるで牡の脈動を、そのまま増幅させたように激しくビクつく。

ウィルはアナの絶頂潮を横から浴びつつ、そんな官能的すぎるキアラの反応を眺めながら、長く膣内射精し続けた。



「持つ者が持たざる者に施しをするのは当然のことよ——はああん！」

「^{まつりごと}政と男性は話が別です！ ウィルさんだけは私がひとり占め——くうううん！」

上下で向かいあったまま己を取りあつて口論をする母と娘を、少年は交互に何度も貫きはじめた。

（めちやくちやいい！ たまんない、この連続セックス！）

若々しく引き締まり、性の快感に敏感なエリーゼ。

女体も精神も、大人の女として脂の乗りきっているアナ。

抱き心地は対照的で、それだけにこうして交互に抱くことにより、二人のよさがより際立つて味わえる。

それでいて二人は血の繋がった親子。突かれると弱い部分や、腰を振る好みのタイミングなど根深いところは一致している。

そんな母娘らしく共通している部分と、対照的な部分が絶妙のハーモニーを醸し出し、ウィルほど女慣れしている男の興奮中枢をその芯まで沸騰させる。

（まさに親子丼だ！ しかも全ての素材が超特上な、ロイヤル母娘丼だ！）
ルックス、スタイル、そして人格や地位に至るまで。

この大陸で、この二人以上の女は存在しない。

「ほら！ コレがいいんだろ！ ほらほら、またすぐにイカせてやるぞ！」

その極上すぎる母娘丼をウィルは餓鬼のように貪り、肉悦を掻き込みまくる。

——ぐちゅん！ ズチュヌチュ！ ずばばばばん！

己のペニスが二つの蜜壺を往復する粘膜音と、牝肉を打つ乾いた音が、広い女王の寝室に充満する。

肉厚な熟れ尻をこれでもかと揺らした後に、イッて間もない若い女体の弾むような抱き心地を深く味わう。

下のエリーゼを散々鋭く喘がせてから、上のアナの尻を抱き子宮から絞り出すような粘っこい喘ぎ声を上げさせる。

「んはあああん♥ もっと奥までじっくり突いてええ♥」

「は、はちきれそうですう♥ ウィル様が私のなかでパンパンになっていきますう♥」

「もお、エリーゼったらママからオチンチンの横取りしてえ——んちゅん♥」

「それはお母様こそお——んちゅん♥」

しかも二人はウィルを取りあっているながらも、何度も濃密なキスを交わし、互いの乳房や身体を愛撫しあっている。

それは対照的な食感であるトロトロの生卵と若い生鶏肉が、セックスの炎によって渾然一体となり、完璧な親子丼として出来上がっていくような光景だった。

「ああッ！ もうイク！」

そんな最上級ロイヤル母娘井があまりに美味すぎて、アナの尻を抱いている時にウィルもとうとう限界を叫んでいた。

そのまま身体の内側から湧き上がってくる、射精直前特有の爆発的な衝動で、丸みのある熟れ尻をガムシヤラに突きまくる。

「あああああ！ イクうううう！ 私、またイッチやううううう！」

今までにないその激しさに、アナがエリーゼとのキスを解き、大きく顎を仰け反らせて絶叫した。

四つん這いの女体は、まるで少年の激しい突入のエネルギーを内側に溜めるようにイキんでいく。

そのためねつとりとペニスに馴染んでいた膣壁たちの締め付けが強くなり、爆発直前のペニスにトドメの肉悦をもたらしてくれる。と。

「イクううう！ 焼けた鉄みたいなウィルのオチンチンでイッチやうううううう！」

アナはこちらの絶頂のタイミングに合わせるように、全身を大きくビクンビクンと震わせはじめた。

「ああああ！ 俺も、もうッツツ！」

ウィルはそう叫ぶと同時に、限界ギリギリのペニスをアナから引き抜いた。
すると女王はその直後に――ぶしやああああああああ！



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！



二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！



二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！



サイズ:文庫

リアルドリーム文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラソベ！



サイズ:文庫

あとみっく文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!